

(著書)

体育と指導者

—— 体育教師とコーチ，何が違うのか ——

久保正秋*¹

Physical Education and Teacher/Coach

by

Masaaki KUBO

著書名

友添・岡出編 (2005) 「教養としての体育原理」 大修館書店
執筆担当；第2部第9章，pp. 78～83.

本書の概要

本書は「現代の体育・スポーツを考えるために」という副題が示すように，体育やスポーツの本質を考え，あるべき体育やスポーツの原理，原則を明確に論じることを試みている。本書は「第1部 体育原理への誘い—体育原理の基礎理論」「第2部 体育原理の深層へ—体育原理の発展理論」「第3部 体育原理を考えるために—現代スポーツの周辺」「第4部 体育原理を学ぶ人のための基本文献案内」の4部構成となっている。

久保の執筆担当部分は第2部の9章であり，「体育原理の発展理論」に位置づけられる。第9章の題目は「体育と指導者」，副題「体育教師とコーチ，何が違うのか」であり，章の構成は以下の通りとなっている。

1. 「コーチは教師である」論
2. 「教師/コーチ」の役割葛藤
3. 「教師/コーチ」から「コーチ」へ
 - (1) 「ティーチング」と「コーチング」の相違
 - (2) 「コーチング回路」と「コーチング実践」

* 1 体育学部スポーツ・レジャーマネジメント学科

(3)「教師/コーチ」の変貌

4.「運動部活動」の指導とは何か

本章では、「コーチは教師である」と主張される理由、そして「教師」が「コーチ」を兼ねること（教師/コーチ）の問題を検討し、さらに「教師/コーチ」が教育から離れ「コーチ」へと変貌していく様相を「コーチング回路」という概念を用いて説明し、「運動部活動」の指導とは何かを考えることを狙いとしている。

まず第1項では、アメリカにおける「コーチは教師である」論の論拠を批判的に検討し、コーチの教師としての「地位」、媒体とする競技スポーツの「教育的有効性」、選手との親密な「人間関係」という状況のみを論拠として「教師である」と主張する正当性は認められないことを示した。

次に第2項では、「教師/コーチ」の役割葛藤と役割過負荷の問題を取り上げ、この二重の役割が故に「教師/コーチ」はティーチングよりもコーチングの役割に焦点を当てるようになり、本来的な「教師」の役割を果たすことが困難となる現状を論じた。

さらに第3項では、まず「ティーチング」と「コーチング」の相違を、教育哲学者シェフラーの「教える（ティーチング）」という言葉の分析を用いて明らかにし、「コーチング」には「訓練し、目標へとリードする」という「ティーチング」を超えた意味があることを示した。次にこの「コーチング」という一連の行為をひとつのプロセスとして捉え、「哲学」―「計画」―「組織化」―「経営」―「評価」の各段階からなる「コーチング回路」、そしてその作動である「コーチング実践」という概念装置を提唱した。そしてこの概念装置を「運動部活動」の指導に導入し、現状の問題点の分析を行った。その結果、「運動部活動指導の過熱」などと批判される現象も、「コーチング回路」における「哲学」を忘れ「ショート」したものとして解釈できることを示した。

第4項では、わが国の「運動部活動」の制度的位置づけを概説し、現状では「教育的空間」と「競技的空間」から影響を受ける「教育的/競技的二重空間」に存在していることを示した。次にこの「競技的空間」からの勝利への強い「ノイズ」によって「教師/コーチ」は、次第に「子どもたち」を忘れ、自分自身が勝利を追求する「コーチ（権力者）」へと変貌していく様を論述した。そして最終的に、「教師/コーチ」は「競技的空間」からの「ノイズ」に屈しないためにも「何のために指導をするのか」という「哲学」を持たねばならぬことを論じた。この「哲学」によって「教師/コーチ」は「教師」であることができるのであると結論づけた。